譯註

（其の一）

譯註（其の一）

(1) Upanishad 訳註（其の二）大二頁以下参照。

(2) Devendra-nath Tagore. のこと。巻頭畧伝参照。

(3) Buddha の音訳なり。ブッダとは「覺者」である。永遠の佛法、即ち永遠の眞理を足るものである。この永遠の眞理は

万人に平等するものである。佛陀はそれを説き伝へたのみ。たとひ釈迦が出現せずとも佛法は存する。佛教に於る信仰の対象は永遠の佛法である。万人が佛陀となり得るのである。だから佛陀と云ふ語は固有名詞ではなく、偉大な聖者達に対する尊称である。然しこゝで云ふ佛陀とは勿論西紀前六世紀の中葉にサーキア族（釈迦族）の都カピラヴァストゥ（迦毘羅衛城）の城主シュッド

ーダナ（浮飯）王を父とし、マーヤー（摩耶）夫人を母として生れた悉達多（シッダールタ）のことである。彼は直倒その氏族の名がゴータマ（瞿曇、喬多摩）を以て呼ばる。幸福な太子たるべき彼は廿九才（或は十九才）の年、王宮を去つて山林に入り、洒地肉林を捨てゝ苦行者や修道僧の道を選び、ガヤー地方に到り、マガダ王の首都王舎城の附近に庵しを。やがて彼はウルビーラーの地では厳しい苦行を始めたが、六年のを以も知なく、附近を流れるナーイランジャー（尼連禅）河で深浴し、体力の恢復をなし、南北方がヤーの大菩提樹下で結跏趺座した。を以から十日目、三十五才の二月八日、暁天に明星の光芒さやけくきらめく時解脱智を得た。「煩悩悉已断。諸漏皆空竭。更不復受生。是名盡苦際。」と唱へた。

正覚を得た仏陀は尚ほ三週を静修し、

自己内証の法を弘くせるに教あべきやを熟慮した。彼は默して世を捨らうとしたが梵天の切なるすゝめによりを止め、ガヤーを去り西方カーシー国の鹿野苑に赴て、かつて彼の成道を期待して共に修行してゐた五人の比丘に法を説いた。こゝ最初なり。佛陀の遊行、布教の生活は四十五年の星霜を閲して老齢八十才となった。病を得し一急性腸カタルと云はる）彼はクシナガラの附近サーラ（娑羅樹）の林園中に憩ひ、阿難をして娑羅双樹の間に枕を北に向けて床をのべさせ、右脇を下にし、安祥として大槃涅槃（マハーパリニバーナ）に入った。こゝ此西北方四八四年頃とされる。その教理については、訳註（其の二）四一頁以下を見よ。なお八五―八七頁。二〇九―一〇頁。二二〇頁。

(4)

Karma-Yoga. Karma とは行作、行業、惑業、祭事等を凡て同時に意味し、わが

おこなひ、いとなみ、まつり等の諸事を包含し訳し難し。

婆羅門教では禅定（訳註其の二の四一頁以下を参照あれ）による行法を一般にヨーガと云ふ。ヨーガは広く精神統一の方法に名付けられし名称である。之には特殊の教義を有する学派と（ヨーガ学派）なり、根本聖典瑜伽経が編まれ、パタンジャリの作と伝へられる。耆那教（ジャイナ）では業を霊魂に抜び付ける身、口、意の作用をヨーガと云ふも、これは特殊の用法である。

ヨーガは実修（実際的修業）と訳される。

サルマ！ヨーガは要するにあらゆる行作瑜伽と云ふべく、積極的な活動力をして行作の秘訣を把握せしめ、自己支配を完全ならしめる道、ここに於て凡ての主客の相対界を超越した絶色なき最高境に到達する。自我は完全にその純潔と栄

光を発現するために幾生を距てゝ輪廻し、自己の業を自ら変じつゝ向上して行く。こゝが業の法則である。

なほ、ギーター（訳註其の二・五五頁以下）では、こゝを無私無欲の善の活動力を使用して神の活動力と一になる道と説かれてゐる。

(5)

Accomplishment, performance の意、又 Sādhana は男性・女性（ī or ā）中性で、leading straight to a goal, 或は Der weg zur vollendung の意を有する。又、「実修」（瑜伽の実修）と訳される。

(6)

ギリシヤの都市国家は一万人を理想とする極めて小規模な都市国家であつた。

尚ほ、ギリシヤ文明、西洋文明の特色等概観には吉山岩男氏著「文化類型学」（弘文堂教養文庫）が恰好なり。

(7) Divide and Rule. 英国の植民地統治方策として余りにも有名である。印度に対するその適用については、大川周明「米英東亜侵略史」（「青年書房」）に面白く記載あり。尚、こゝに「小党を分裂せしめて以て天下を治める」「敵をして互ひに分立対抗せしめて覇を天下に唱へる」ことゝの両義を有するものなり。こゝでは勿論前者の意味の場合なり。

(8) 西記第二〇〇〇年頃のこと。詳しくは訳註其の二・二頁以下を見よ。

(9) 和辻哲郎著「風土」（岩波）はより根本的な視野を我々に与へてくれるであらう。尚、気候について、荒川秀俊著「大東亜の気候」（朝日新聖書）を見られよ。

(10) 不物が根本的に一なることを指す。

(11) Veda. 訳註其の二・四頁以下に詳細に説く。

(12) Gayatri. ガーヤトリ神歌・アリアン族の家にて、入胎より成婚迄財孰れも清浄の儀式中、最も大切な又法式に誦する歌。吠陀の摘要なり。（リグ吠陀・三、六二、一〇）

(13) マヌ法典ではクル地方とガンジス河だけを挙げてゐるが、マハーバーラータ（訳註其の二・三二頁参照）ではヒンヅスータンやデッカン高原、北はヒマラヤを越え、カイラーサ湖に至る迄の聖地が挙げられてゐる。とにかく多くあり全国的である。巡礼地の首位は印度と云ふべし、クル地方である。それは福地（ダルマ・クセートラ）と呼ばれてゐる。これについて尚詳しくば、井系徹山著「印度教」（五三七―四〇頁）を

（印度にて人格化されたる姿を示したもの）

見られよ。

(14) ネロ皇帝の故事を想像されよ。(37—68. Nero)

(15) 西紀一四九二年コロンブスがアメリカを発見。次いでスペインが大陸を占有。やがてメキシコにペルーに金銀が発見せらるゝに及び南方に広大な植民的植民の端緒が開かるゝに至った。史上一大。七年ヴァーゲニヤに最初の恒久的

植民地がイギリスにより建設される。フランス、オランダ、スエーデン、デンマーク等も夫々植民地を建設す。しかしてその人々はヨーロッパの殆どすべての民族よりなり、それにユダヤ人と黒人とを混へた混血なるものである。(美、ソ、蘭、仏、葡、独、瑞、猫、黒等なり。)植民地発展の主目的については商業的のものと云るが通説である。

。尚、アメリカの発展の様相について

ては、少し古いが、Max Farrand, "The Development of the United States" 1918. が手頃である。こゝには、岩波新書(82)(83)「アメリカ発展史」(名取、宮本訳)があり参照に便。

(16) Rishi. 聖者、詩聖。梵天の心より生じたる七聖賢の一人。(吠陀の作者と称せらるゝ霊感詩人。)

(17) Sampraṇayānam vishayo jñānatriptāh
Kritātmānī vitarāgāh prasantāh
Tē sarvagam sarvatah prāpya dhīrāh
Yuktātmānah sarvamēvāviçanti

(18) (1)を見よ。

(19) Praçantāh.

(20) Yuktātmānah.

(21) マタイ伝ヲナ九章廿ハ。

(22) (1)を見よ。

(23) ショウペンハウアーはウパニシヤッドのラテン訳フラプネカツトレによりて印度思想を味讀せりと云はる。西洋近世の自我哲学が印度哲学に親近性を有つことは否定し得ぬ。ショウペンハウアーの厭世哲学が（厭世的な意志哲学）
(Schopenhauer. 1788-1860)

ウパニシヤッドの影響を受け居ることは注意すべし。他に、シエリング、ハルトマン、ゲーテ等も然り。
(F. W. J. von Schelling. 1775-1854)
(K. R. E. von Hartmann. 1842-1906) (J. W. von Goethe. 1749-1832)

(24) Brahma. 梵天。創造神。印度教の重要な神の一柱なり。訳註其の二。二〇頁を見よ。尚、梵と梵天との区別はない。たゞ表裏関係にすぎぬ。(143) (132)を見よ。

(25) Sarvāṃ idaṃ saṃvāmi yat kiñcha jagatyāṃ jagat.

No. 21

22

(26) Yo dēvō'gnau yō'psu yō viçvambhuvanamāvivēça ya ōshadhishu yō vanaspatishu tasmai dēvāya namōnamah.

(27) namōnamah. namas > (bow, salution)
namo in compound for namas.
礼拝、敬礼、礼拝。

(28) Çrinvantu viçve amritasya putrā ā ye divya dhāmāni tasthuh vedahametam purusham mahāntam āditya varṇam tamasah parastāt.

(29) (3) 光明。

(30) Brahma vihāra. (144) (147)

(31) Yaçchāyamasminnākāçē tejōmayō'mritamayah purushah sarvānubhūh. (24) 光明。

(32) Yaçchāyamasminnātmani tejōmayō'mritamayah

purusha sarvāmnāthīh.

(33) Tyaktena bhunjīthāh. Mā gridhah. 五三頁末參照。

(34) Gītā. Bhagavad-gītā バガヴット・ギーター の ことなり。訳註其の二、五五頁以下を見よ。聖詩。聖歌。伽梵歌。

(35) Iha chēt avēdit atha satyamasti, nachēt iha avēdit mahatī vinashtih. 高三九頁を見よ。

(36) Bhūtēshu bhūtēshu vichintya.

(37) Yasya chhāyāmritam yasya mrityuh.

(38) Prāṇo mrityuh.

(39) Namō astu āyatē namō astu paratyatē. Prāṇē namō astu āyatē namō astu paratyatē. Prāṇē hi bhūtam bhavyañcha.

(40) Yadidam kiñcha praṇa ejati niḥsritam.
Praṇo vīrāṭ.

(41) Sarvayāpī sa bhagavān tasmāt sarvagatah
śivah.

(42) Praṇo vīrāṭ.

(43) Charles Robert Darwin. (1809-82) 英国の博物学者にして進化論の始唱者。"Origin of species"（種の起源）は有名なり。岩波文庫に翻訳あり。尚、同思想文庫に小泉丹氏の注釈すべき有益な著書あり。参照してダーウィン学説に対する誤つた考へを清算さるよ。

(44) Mahātmā. 大我の意。又、偉大な人に対する尊称に用ゐ。

(45) Na vai are putrasya kāmāya putraḥ priyo bhavati,

ātmanastu kāmāya priyaḥ bhavati.

(46) Paramātmā. 最上我。大我。至上我。

(47) マタイ伝廿五章の五。書廿三八一頁参照。

(48) Sādhu Siṁha. Sādhu = pious なり。善人・聖人・佛陀の弟子に対する呼称と云あべし。

(49) Avidya. 無知。無明。訳註其の二。四七頁以下に説く所を見ら小よ。

(50) Bodhi. 菩提。正覺。

(51) 例へば、封建制度等を云ふ。

(52) 渾一の理想実現のこと。

(53) Jaṁrāṭaikaṁ jāṁrāṭha ātmānam.

(54) Amritasyaisha sētuh.

(55) Ēkam rūpam bahudhā yah karoti ** tam ātmastham yē anupaçyanti dhīrāh, teshām sukham çāçvatam nētarēshām.

(56) Ēshah dēvō vishvakarmā mahātmā sadā janānām hridayē sannivishtah. Hridā manīsha manasābhiklriptō ya ētad viduramritāstē bhavanti.

(57) Vishvakarma. 毗首羯磨。「名例面ニ脫
カレタル。工巧、建築ノ神。造一
切者。ニ於テ味陀。十九人ノ弟子ノ一文。
ヤハリ人ニマハ教授。

(58) Ávirāvīrmayēdhi.

(59) Rudra yat tē dakshinam mukham tena mām pāhi nityam.

No. 29

(60) Rudra. 魯達羅神。destroying deity. なるも、healing power をも有す。
作駆は褐色、頸は青く、歎る光暴な性質の神。嵐の破壊力、又は瘴癘、疫の害悪を人格化せるもの。リグ・吠陀には三回の讃歌あるのみであるが、アタルヴァ吠陀になると最高神と認められ、手を世にまるに一小して有力となり、印度教に於ては、その別名シヴ神の名を以て、ヴィシュヌ（ヴィシヌ）神と並び最高の神格となつてゐる。

(61) Gaetōmā sadgamaya, tamasōmā jyōtirgamaya
mrityōrmā mritangamaya.

(62) Vishvānideva savitar duritāni parāsuva.

(63) Vishvāni deva savitar duritāni parāsuva. (62).

(64) Yad bhadram tanna āsuva. 一四六頁以下を見よ。

(65) マタイ伝第五章六。

(66) Namah sambhavāya. Namah śankarāyacha.
Namah śivāyacha, śivatarāya cha.

(67) Rish. manipeating God.

(68) Ādirāvīmayādhi.

(69)
(70) を見よ。
(67)

(71) 創造は如何に偉大な働きとは云へ、要するに人工的な制作の延長にすぎない。創造と云ふ限り不定全なものである。

(72) ソクラテスをはじめ、ギリシヤの哲人は多く此世に悪はないと云ふ。悪は非存在である。これがギリシヤ哲人の最

宮の智慧であつた。要は要するに善の欠乏である。存在するものは善である。詳しくは考みべし。

(73) 善を云ふ。（本文二〇頁参照。）

(74) 万物と融合せんとの心欲なり。

(75) 眞理なり。尚、眞理につき、アウグスチヌスの「ソリロキア」を一読あれ。得る所多し。邦訳は、高桑純夫氏により筑摩書房より出てゐる。ソクラテス・「クリトン・辯明」（岩波文庫）をも繙かれよ。

(76) 刹那の自己欲望の満足を云ふ。

(77) Gita. 註(34)を見よ。

(78) Karma Yoga 註(14)を見よ。

(79) Buddha. 註(3)を見よ。

(80) 宇宙を自己の手足の如くに使ふやうになること。

(81) 牢獄を起像さ心よ。

(82) 不滅の完全に奉仕する時に本当の位置を占める。

(83) 旧約聖書創世記II、17 エデンの花園に於る善悪の智慧の木の実しの故事を起像さ心よ。悪魔の誘惑を受けたのである急せ。

(84) 之を例へば、基督教、印度教、新興の諸宗教、しり教等。

(85) Nirvana. (パーリ語では Nibbana) 涅槃と音

訳す。「吹くしから「吹き消すし意味となり、又「覆ふし といふ別義も添加され、人生が情慾の火を吹き消し覆ひかくして得た寂靜安穩の境地。更に拡じて福楽歓喜の状態をあす。涅槃の境地が高揚され、その大用が発揮される境は大乘佛教に至ってからのことであった。 L. de la Vallée Poussin; "The Way to Nirvana" (邦訳あり) 一読されよ。

尚訳註其の二佛教の所を見られよ。尚、本文二一〇頁。

(86) Avidya. 註(49)を見られよ。

(87) 所と云ふ調和のある全体を形造るのを云ふ。多は各「自我」を指す。

(88) 註(49)を見られよ。

(89)(90) (88)に同じ。

(91)

dharma. 達磨と音訳す。法と訳さる。その

の使義は極めて多面的である。「持つ

し(dhr.)と云ふ使法より出で、自性を保

持して改変せず、規範となつて物の解

を生ぜしめると解され、物のあり方、

あるべき姿、の義にて、一般存在物が

存在する在り方、存在の契機を指す。

女性とはこゝから出る。

印度教の法は「吠陀のリタ」「人倫的

なるもの倫理的義務、徳」「善行」「

宗教的義務」「理想」「四姓の状態等

」、「神・絶対者と同じもの(宇宙の

理法)」「因果・業などの神聖な規律

(ママ)」「一五等)」「現実と理想との

媒介(副次的種姓の起源・義務の説明

)」、「習慣、伝承等の習例」「不文

法」、「汎種族法」「婆羅門優越保持

の規定」「個人法、種族法、種姓法の

互に見らるゝ社会的心理的差別」「起

動揺迷〜と遮滅一括〜の法し等に分類し、業と信愛もダルマに含まれるとする人もある。

佛教では最初佛陀の教説は法と呼ばれ、弟子の規範は経と呼ばれたが、後には之は律となり、法は経と呼ばれ、法の中の論母に対する研究が論と呼ばれ、経、律、論の三蔵が成立し、そして全体が又法と呼ばれ、定説的在り方を示すものとなった。

然しダルマと云う語は佛陀以前から印度民族の人生観にとっては重要な役割、性的使命、財宝と共に人生の三大目的とされ、佛陀もこれを以て自家薬籠中のものとしたにすぎぬ。阿育王(アショーカ)はこのダルマの教説を直接平明にし、世俗的にし、大いに弘通し、シリア、エジプト、キレネ、マケドニア、ギリシヤ人の子に迄及ぼした。達磨佛教と云はれ、やがては大乗佛教を生む基礎が

南かルしは何者なことである。

(92) 種子と共に本性を指す。

(93) (91)を見よ。

(94) (3)を見よ。

(95) (34)を見よ。

(96) Śubhāśrikī jñāna bala kriyācha. (171).

(97) Anandādhyeira kshalrimānī bhutāni jayantē, anandēna jātāni jīvanti, anandamprayantyabhisamviśanti. (138). (140). 尚、三八七頁を参照。

(98) yuga. 註(4)に説く所を見よ。精神統一。

(99) maya. 幻力。性に迷想、迷妄、幻覚、錯覚を意味す。

(100) 旧約聖書創世記第四章、Cain と Abel の故事を起はしま。

(101) Amandayupamamritam yadabhiti. (141) 先頁。

(101)′ 壺の中に浸らすことなり。

(102) amritam. りゞ吠陀の中の神格にソーマ(Soma)なるものあり、これは一種の植物を搾つた液汁で、これに水や牛乳を混ぜ汁に捧ぐ。今日の酒に相当する興奮剤である。て此で、インドラ其他の神々はソーマの酩酊によつて狂暴となり、一層勢力を増すものと考へらる。又、ソーマは人を陽気にして興奮やさる力がある故度々を法す業物とせら此、更に不死の、不老の霊薬となり、神々が不老不死たるはソーマを飲んだ故とさる。ソーマは此世には月と同一視さ此

又、月かちしたゝる不死の靈液と云ふやうな至聖的のものとなつたと云はれてゐる。これを Amrita（甘露）と云ふ。不滅の、永久のとかいふ訳が由来する。

次方なり。(142) 参照。二八七頁。

(103) 本当の生命と似而非生命なり。

(104) 聖者等を云ふ。

(105) 自我を絶滅したいとか神と深一を得たいとか云ふことを云ふ。

(106) Bodhi. (50) を見よ。

(107) 二二七頁。本当の自由と似而非自由を云ふ。

(108) Satyam. 眞実、実有、実在。

(109) 新約聖書ヨハネ伝第八章五八。「まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでゐ前より我は在るなり。」

(110) 神を云ふ。

(111) mukti. liberation. 訳註其の二、一七頁、三〇頁以下。四〇頁以下佛教の項を見よ。

(112) santam. tranquility, peace of mind.

(113) śivam. welfare, prosperity, bliss.

(114) advaita. destitute of duality, identity of Brahma or of the Paramātman or supreme soul with the human soul. 又は、ultimate truth, identity of spirit and matter.

尚こゝの個我は生命我のことにして、個人主我的個人我を云ふのでなく、絶対者の前に平等一如れる生命体に他ならぬのである。

(114) 利己心を消すことを云ふ。

(115) 神の精神なり。

(116) 生命なり。

(117) 生死の波なり。

(118) 生命の海は静寂なり。

(119) 宇宙創造の日と同じに今日も創造を続けてゐる意味。

(120) この宇宙は神の聲てのものから出来てゐる音楽と云ふべく、その出発ではな

いと云ふ。

(121) 宇宙創造の第一日。

(122) 之を例へば、神から分離せるものと等しきが如き数。

(123) 邪心浮を指す。

(124) 制限を脱せんとするなり。

(125) 例へば、金とか名誉とかの有限のものを至高のものと崇めることなり。

(126) 完全へ向っての流れなり。

(127) Adharmenaivahate tavat tato dhadrani pasyati tatah sapatnan jayati samulastu vinasyati.

(128) 神へ帰ればの意味なり。

(129) *Arundhra.* a pair of opposites.

(130) いゝ文章を書くことなり。

(131) こゝは科学が扱ふべきものなり。次行は(99)参照。

(132) *Ramayana.* ヴィシヌ神のアヤ化身ラーマ王の犯行。詳細は、訳註其の二、三二頁以下を見らるよ。尚、ヴィシヌ神は、

Vishnu にして、りグ、吠陀以来の神であり、本来は太陽の光明を神格化せるものである。梵天(ブラフマ)の創造神、シヴァの破壊神なるに対し維持神と考へらル、また化身して人数丈必の生数となり、その恩惠を汎く現糸界に施す神とする点が強いものである。」(ラス、ビハリ、ボース 共著 印度神話・ラーマーヤナ 宮田健 註 敬敬書房)が平易で初学向きの。

(133) *Sita.* 印度女性の鑑と仰がれ、崇はる。

(132) を見よ。

(134) Rāvaṇa. 悪魔の王。セイロン島（ランカ。一島と云ふ。）に城を構ふ。(132)巻照。

(135) Rāmchandra. ラーマ王子のこと。羅摩梅陀羅と漢字化されてることもある。印度男性の鑑。(132)巻照。

(136) Hanuman. 猿王ハヌマンの事なり。(132)巻照。

(137) 訳註其の二、三六頁。

(138) (97)を見よ。

(139) 三五二頁を見よ。尚、訳註(157)(158)巻照。

(140) (97)を見よ。

(141) Amandavīpamamritam yad vithāti. (101)巻照。

(142)

(102)を見よ。

(143)

(24)を見よ。尚、小人格の場合は梵。と訳し、人格神の場合は梵天と訳す。梵天。

は仏教「阿含」にもしばしば（現はる）み、印度教にて、ブイシヌ、シヴァと共に最高神と考へられ、又、この三神の三位一体説も現はる。梵天は印度一般の共通神である。梵と梵天との区別はない表裏関係にして、両者共には区別はまい。宇宙と教えと印度では一致してゐるからである。

(132)さも係者。

(144)

(130)を見よ。（四八頁。）

(145)

sarvanubhih. 「all-perceiving.」「一切に遍在せる」「一切を括する」と訳さる。

(146)

Ko hyevānyāt kaḥ prāṇyāt yadeṣha ākāśa ānandō

na syat. (184)

(147) 四八頁。二九二頁。を見よ。

(148) Ganges. 印度の有名な大河。

(149) 自然界の事物に於る連続を突然破り、人のみ離れて自然界の事物と別なものと見ることを云ふ。

(150) paramatman. (46)を見よ。

(151) (97)を見よ。高、二八四頁。

(152) Vaishnava religion. (毗紐教)。訳註其の二、五五頁を見よ。

ジヴィシヌを主神と仰ぐものなるも、之をバガヴァタ派とパーンチャラトラ派とに分たれてゐる。①個人我と非情物質とは梵と同じく実在せるもの、②信愛が解

脱に達する手段なること③梵は人格的の自在神にして、無限の正善の性質を有するものなること、④個人我と梵との別は決して全く失はれないこと、⑤個人我はその量は子大であり、その数は無限であり、各々知と活動とを属性として有することを特色とする。

(153) (152') 二八五頁を見よ。

Mā mā himaṁ.

(154) Kuvanneśha karmāṇi jijīvishet satam samāḥ.

(155) mahatirinashtih. great destruction.

(156) Māham brahma nirākuryyāṁ mā mā brahma nirākarot.

(157) Bhayādasyāgnistapati. — "For fear of him the fire doth burn," etc. 二八五頁参照。

(158) Anandādhyeva khalvimāni bhūtāni jāyante.

— "From joy are born all created things," etc.

(97) (138) 等を見よ。尚二人で及。

(159) (91) を見よ。

(160) Yadyat karma prakurute tadbrahmani samarpayet.

(161) Samyasin. 遁世者。離生者。婆羅門は一生の中に四つの時期を経丁することになつてゐるその第四番目の生活。一切の世事、沖事を捨離し、悠々自適、行雲流水の生活を送るのである。解脱を目指し、愚念を捨て、身を行雲流水にまかす遁世遊行者なり。よい意味である。

(162) Brahmavidāmvariṣṭhah.

(163) ātmakrīrha ātmaratiḥ kriyāvān.

(164) Bahudhā çakti yogāt varṇānanekan nihitārtho dadhāti.

(165) (11) 其又ヨ。 及諸佛の ||、 三及次丁。

(166) ātmadā baladā.

(167) Sa no buddhya çubhayā samyunaktu.

(168) swārtha. — own affair or cause, own aim or object. swa — sva — 自己。

(169) nihitārtha. nihita — fixed or kept in, inherent. arīha — aim, purpose, etc.

(170) Vichaiti chāntē viçvamādau.

(171) Svābhāviki jnānā bala kriyā cha. (96)

No. 69

70

(172) 神なり。三六五頁を見よ。

(173) 神なり。

(174) 訳註其の二、六二頁以下。

(175) (97)を見よ。

(176) マタイ伝第五章の五。「幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣ぐべし」中の語。南、八四頁を見よ。

(177) 単に美のみならず、眞理も知識も常ては狭き殿堂に閉ざされてゐた。

(178) Brahmins. 訳註其の二、八頁以降を見よ。印度四姓の最上。

(179) タゴールが最も愛好せる詩人の一人た

樣子の詩人 John Keats (1795 – 1821) の「Ode on a grecian urn」中に多く有名な句を見る。

(179) (97) を参照。

(180) 再四反芻する。

(181) nityo 'nityānām. — nityas anityānām.

the permanent in all that is impermanent の義。

(182) rasānām rasatamah — the highest abiding joy unifying all enjoyments の義。

(183) Īçāvasyamidam sarvam yat kincha jagatyāñ-jagat. Tēna tyaktēna bhunjitha mā gridhah kasyasviddhanam.

(184) Ko hyevānyāt kaḥ prāṇyāt yadesha ākāça ānando na syāt. (146)

(185) Vaishnava lyrics. (152) の吐綬(鼓)鳥を見る。(〃 〃 〃 反)。

(186) Maitreyi. 古ウパニシヤツドの中バ思想を代表する哲人の一人、ヤーガニヴルクヤ(Yājñavalkya)の妻なり。梵論者である。主人が従来の生活を捨てゝ新しい行乞生活に入るに際する時のことである。「ブリハドレ(Bṛhad-āraṇyaka-upaniṣad)」篇にヤーガニヴルクヤの夫人に対する決別の辞があり、尚ニルヴァーナ篇にも殆ど同文にて掲載されてる。就て見られよ。

(187) 神のこと。

(188) 者那教の祖マハーヴーラ(大勇)、大乗仏教のナーガールジユナ(龍樹)、ブラーフマ、サマーヴ(梵教会)のラーム・モハン・ライ等を参照されよ。

(189) 五七頁、三九七頁を見よ。

(190) ヨハネ伝第十章三〇、「我と父とは一つなり」(I and my Father are one.) を指す。尚これについて、石田憲次著「キリスト教的文学觀」に興味深き見解あり、就て参照あれ。キリスト教について、一わたり文化史的に手取り早き知識を、高山右男著「文化類型学」、和辻哲郎「原始基督教の文化史的意義」により得られるであらう。

(191) Rāham manye suvedeti no na vedeti vedacha.

(192) Yato vāche nivartante aprāpya manasā saha
ānandam brahmano vidvān na bibheti
kutaschana. (193) 同三五頁を見よ。

(193) 同三三頁を見よ。

(194) antarātman. inner individual soul.
the soul, the internal feeling, the heart or mind.

(195) paramātman. the supreme soul. (46) (50)

(196) ātman. 達、達魂、我。說話者ヲ云ハル。

(197) Satyam jñānam anantam brahma yo veda nihitam guhāyām parame vyoman so'śnute sarvan kāmān saha brahmaṇa vipaścita.

(198) mantram. 詩句。 sacred text or speech. a prayer, or song of praise. a sacred formula addressed to any individual deity.

(199) Yadetat hṛidayam mama tadastu hṛidayan tava.

(200) eshah. the act of seeking or going after. that which is to be aimed at 目的物。

(201) Eshāsya paramā gatih.

(202) Eshāsya paramā sampat.

(203) Eshāsya paramā lokaḥ.

(204) Eshāsya paramā ānandaḥ.

(205) līlā. play, sport, amusement.

(206) Daurbhikshāt yāti daurbhiksham kleçat kleçam bhayāt bhayam. — She passes from starvation to starvation, from trouble to trouble, and from fear to fear. 6 終。

「藤藤教の」終り。

No. 88

82